

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第一章 午後八時二十八分 午前二時一六分

わずかの間、部屋はしんとまりました。ミス・ラフォースは真面目な顔をして暖炉のそばに立っています。そしてちょっと身体を震わせました。ミス・ペティグールは深い水の中からようやく浮き上がります。

「さてと」「ここごろと気分が変わるミス・ラフォースは長いこと落ち込んでなどいられないのです。」「あなたはどうか分からないけど、興奮するとあたし、お腹がすくのよね。やっぱりお夕食をとることにしない？ いつも時間は過ぎてるけど、まだたっぷり余裕があるし。何か注文するわ。コース全部はいらなくていいよ。」



島田圭子画

そして電話に手を伸ばしました。ミス・ペティグルーが上品に、一口だって手をつけられませんかなどと断つても耳を貸しません。でもお金のことを考えると良心がとがめます。この新しいお友達にはもうずいぶんいろいろと甘えてしまっていましたから。「何言ってるの」とミス・ラフォースは退けます。「食べものを見たらすぐに食欲がわいてくるわよ」

その通りでした。夕食が届くと、食欲は魔法のように戻ってきました。誰だって、まずいシチュー、味気ないパイ、堅いローストビーフの食事をつんざりするほど単調に繰り返していたなら、ミス・ラフォースの御馳走にしらんぷりでなどいられません。それにミス・ペティグルーが生まれてこの方ずっと食べてきたのはそういうものなのです。夕食はおいしくて、食べることで以外すべてを忘れてしまいそうなのだったのですが、大切な目的から気をそらされるミス・ペティグルーではありませんでした。どうにかしてミス・ラフォースを説得し、ニツクをあきらめさせ、マイケルと結婚させなければなりません。スープ、魚、肉料理が終わわり、デザートになっても戦いは続きました。攻め手はミス・ペティグルー、ミス・ラフォースはたじたと退却します。そこでミス・ラフォースは一計を案じました。ミス・ペティグルーの鉄壁の論理に押しまくられるとまく話題を切り替えるのです。これまでのいろいろな仕事で経験したとびきり面白いことを巧みに語りはじめると、ミス・ペティグルーは「世の中のもう半分の人々の生活を垣間見るのに夢中になって、そのときだけは攻撃をかわされてしまうのです。でも、それは長くは続きません。お話が終わったとたん、直ちにミス・ペティグルーの大砲はもとの攻撃目標に狙いを定めます。」

時間はあつという間に過ぎていきました。ちょうどミス・ペティグルーが（とうとうミス・ラフォースの反撃が弱くなってきたわ）と意気揚々と考えたときでした。ミス・ラフォースは時間に気がつくと飛び上がって叫びました。

「大変！ 時間を見て。すつ飛んでいかなきゃ。着替えないといけないわ。一二時に約束したのもう一時過ぎよ」

慌てて寝室に行こうとします。でもミス・ペティグルーはまだ二人きりでこの議論を続けられる間はミス・ラフォースを逃がすつもりはありません。

「見ていてもよろしいかしら？」と断固とした決意を表明しました。

ミス・ラフォースは逃げ出すのをあきらめました。

「もちろん」やれやれというようにうなずきます。「あたしは女優ですものね」

ミス・ペティグルーはミス・ラフォースのドレッサーの横の椅子に落ち着きました。ばたばたしていたミス・ラフォースは静かになりました。身支度の儀式はゆっくりと進めなくてはなりません。それにミス・ラフォースは時間をつんと気にするタイプというわけではありませんでした。

まずドレスを脱ぎます。バスルームに入って、出てきました。イヴニング・ドレスを選びます。ミス・ペティグルーに向かって朗らかに微笑んで見せました。すつかり前の

陽気な気分に戻っています。鏡の前に座りました。

「ときどき思うの」と明るく言います。「一番素敵なのって、支度をするときよね」

でもミス・ペティグルーは興味深いおしゃべりで煙に巻かれたりはしませんでした。

「なんと申し上げたらあなたを説得できるのでしょっつ」と訴えます。

「グウイネヴィアったら」とミス・ラフォース。「そんなこと言ったら、あたし、恩知らずのブタみたいじゃないの」

「いいんです」とミス・ペティグルーは厳しく、勇気を出して言いました。「思うとおりに申し上げなくっちゃ。心の中ではニックはきつとあなたを裏切ると分かっただけでしょう。いつか、あなただってお年を召すんですよ。そうしたらニックはあなたに鼻もひっかけなくなるんです。五〇歳になってもあの男は若い女性に色目をつかうことですよっ」

ミス・ラフォースはため息をつきます。

「やあねえ！ 暗い話にしちゃって」

「思い切って」とミス・ペティグルーは懇願します。「マイケルとご結婚なさってみたらいかがですの。それに」とずる賢く付け足しました。名誉と貞節の最後の欠片がくるくと風に吹き飛ばされていきます。「うまくいかなかったら、いつでもニックのところに戻るじゃありませんの。ニックと結婚したいわけじゃあるまいし」

「まあ、グウイネヴィア！」ミス・ラフォースは笑います。

「分かっております」後ろめたそうに顔を赤らめました。

「ずるい人ね」とミス・ラフォースがなじります。「あたしがそんなことしないってちゃんと分かっているくせに。彼にぶちのめされちゃう」

「まあ、そんなこと！」ミス・ペティグルーは相手をいさめます。「ちょっと……ちょっとおおげさではありませんこと？」

「おおげさじゃないわね」

「でもそんなさつたほうが、いいことはずっとたくさんあるんですよ」とがんばりませう。「ニックのことをすっかり頭から追っ払ってみてくださいませ。ニックがいなければマイケルと結婚なさいませう？」

「そうねえ」と暗い声になりました。「とっただか分からない」

「でもどうしてですか？」とミス・ペティグルー。「ハンサムですし、お金もおありだし、あるように見えますし、あなたを愛していますわ。どこがまずいんですの？」

「彼、出が悪いもの」とミス・ラフォースは一生懸命言いました。「どうしたって立派な家柄になりようがないわ。若いときには馬鹿なことをしても、結婚となったら！ 真面目な問題なもの。慎重にならなくちゃ。だって……だって、次の世代のことを考えなくちゃいけないでしょう」

「まあ！」ミス・ペティグルーはすっかり面喰らい、尻すばみになってしまいました。

「そういうこと」とミス・ラフォース。

ミス・ペティグルーは負けてはいませんでした。立ち上がると、両手を握り締めます。顔は真剣で、訴えるような表情です。

「あたくし、厚かましいでしょう」とミス・ペティグルー。「出すぎていて、無作法ですわ。きつと追い出したくおなりでしょう。でも、言わなくちゃなりません。あなたが大好きですから。あなたが将来、不幸になるなんて耐えられませんもの。こんな生活をなさっていたら、最後はどういうふうになるか。どうか、どうかマイケルと結婚なさって」

「やれやれ」ミス・ラフォースは微笑みます。「あたしを純潔の道に導くつもりなのね」「そうできますなら」

「それってそんなにいいこと？」

「ええ、ええ、いいことです」と言いかけて、そして言葉を途切れさせました。ミス・ペティグルーはまだ五〇歳にはなりません。でもいつか五〇歳になる日が来ます。そのとき家もなく、友達もなく、夫もなく、子供もいないでしょう。これまで、純潔と名誉を厳格に守って生きてきました。それなのに家ひとつ、思い出ひとつ持っていないのです。ミス・ラフォースだっていつかは五〇歳になります。でも、もし、同じように家も友達もいままに五〇歳になったとしても、ミス・ラフォースの思い出はどれだけ豊かなことでしょうか。

「いいえ」とミス・ペティグルー。「それが一番いいかどうかは分かりません」

「まあ」とミス・ラフォースはやさしく言いました。

ミス・ペティグルーは頭を上げました。

「あたくし、一度も」と息を切らして早口で言いました。「どなたかに愛されたことはありませんの。あたくし知りたいのです。ずっと知りたいと思っていました。あたくしと同じように知りたいと思っている女は何百人もいるんです。つまり、それってその価値のあることなのでしょうか」

「そうよ」とミス・ラフォース。「あたしにはね」

ミス・ペティグルーは座りました。

「あたくしは、あなたよりも年上です」とミス・ペティグルー。「馬鹿な女ですし、あなたほどの機転も美しさもありません。知恵もありません。あたくし、道徳やらきたりやらのことで結婚についてご忠告しているんじゃないんです。経験からなんですわ。あたくし、友達も、お金も、家族もありません。ただあなたがそんな目にあつてほしくないんです」

「まあ、グウィネヴィア」とミス・ラフォースはまた言いました。

「心優しい男性なら、それだけでいいですよ。あたくし、これまでいろいろな立派な方々にお目にかかってきましたけれど、心の優しい方というのは本当に少ないのです」「まあ」

「初めの方ね、あの方も優しい方でしたわ」とミス・ペティグルーは真剣に言いました。

「でもね、あなた。あの方とのご結婚はお勧めしませんの。すぐに結論に飛びついてしまうのはどうかと思いますけれど、あの方には外国の血が混ざっておいでじゃありません？ 生粋の英国人ではありませんわ。結婚に限っては、自分と同じ人種にこだわるほうが安全だと思いますの」

「それはそうね」とミス・ラフォースが控えめに言いました。

「それからニックですけど ニックは長い目で見たら、あなたを幸せにしてはくれませんわ。ご自分でも分かっているんじゃないでしょうか。でも、マイケルさんは！」と顔を輝かせました。「もうこれ以上は言いませんわ。ずいぶん出すぎたことを申しましたもの。でも、こんなに若い男性が気に入ったことはこれまでにございませんわ。それにあの方は真正正銘の英国人ですもの」

「つまり」とミス・ラフォース。「あなたはマイケルにすっかり参ったってことね」

「そうなんですの」

「もう、グウィネヴィアったら！」と、ミス・ラフォースは言い、自分を抑えられずに身を乗り出すと、ミス・ペティグルーを抱きしめてキスをしました。

「考えてみるわ。約束する」

ミス・ペティグルーは力を使い果たしてどっと疲れてしまいました。

「あんなにはつきり物を申し上げて、お気を悪くされないといいんですけど。でも言わずにはいられませんでしたの」

「気を悪くするですって！」とミス・ラフォース。「あたしが？ あたし、母親らしい母親がいなくて言わなかった？ これまであたしにわざわざお説教しようなんて人は誰もいなかったわ。嬉しかったの。何よりも嬉しかったのよ」

そしてドレッサーのほうに向き直りました。ミス・ペティグルーはじつと興味深げにその手つきを見つめて、頭を振りました。

「ねえあなた」とミス・ペティグルー。「そんなにたくさんお化粧をして、その、レディにふさわしいと思われませんか？」

「あたし、前にレディのふりをしたことがあるの」とミス・ラフォース。「結婚となると、家柄の紳士を夫にすれば、将来の仕事は約束されたようなものですもの。でも聞いてびっくりなんだから。その彼は貴族だったの。と言っか、ご老体が亡くなったらそうなるってことだったんだけど。昔からあたし、称号とか家柄にちよつと弱いよね。だからお上品なふりをしたわけ。彼、口紅が嫌いって聞いたの キス魔なのよ。どういふふうにつながるかは分かるでしょ。彼、口紅の跡をつつかり見のがすし、おまけにご老体はすぐ目がよくて、道徳にやかましい人だったのよ」

俗世の知恵をどんな身につけているミス・ペティグルーは、口紅とキスのつながりにぴんときた気がしました。

「それでね、あたしはレディのふりをしたの」とミス・ラフォース。「口紅はなし。脚も見せないってこと。つんと澄まして、近寄りがない感じで。相手に誘いかけるなんて

全然なし。そしたらその次の週に、彼が口紅を塗りたくって脚をここまで見せて、色気ぶんぶんの雌犬と歩いているのを見たってわけ」

「まあそんな」とミス・ペティグルーが口をはさみました。「あの、その、他にも言いようがありますのよ」

「色気ぶんぶんじゃなくて？　じゃもつと悪い言葉を教えて。そつちを使つから」

「いいえ、いいえ」とミス・ペティグルーは顔を赤らめました。「雌のわんちゃんとか」

「でも、あの女は雌のわんちゃんじゃないわよ。雑種の雌犬よ」

ミス・ペティグルーの考えでは「何事も控えめが一番」です。まだ面食らっています。

ミス・ラフォースの説明は説明とはとても言えないし、ややこしくて、さっぱり要領を得ないと思いました。でも、不道徳な方向に向かつて着々と歩みを進めているミス・ペティグルーにとっては、口紅が好きでなかったこの貴族閣下がどうなったかのほうがずっと興味があります。

「その貴族の方はどうなりましたの？」

「口紅脚女と結婚したわよ」とミス・ラフォースは簡単に言いました。「ご老体が亡くなってからね。それであたし、学んだの」

そして考え深げに口紅を塗りました。ミス・ペティグルーは深くうなずきました。

「分かりましたわ」とミス・ペティグルー。「夫を獲得するにはずいぶんいろいろなコツを学ばなければなりませんのね。あたくしはとんでもない無知でしたわ」

「すぐ飲み込むわよ」

「ぜひいろいろ教えていただきたいですわ」とミス・ペティグルーはすっかり感心して言いました。「ただ、あたくしの攻め時は過ぎてしまいましたけれど」

「あきらめちゃだめ」とミス・ラフォース。

最後にパウダーをはたきます。

「さ、これで終わり。ほらこつちに来て、グウイネヴィア。あなたの番よ。前のお化粧をとって」

ミス・ペティグルーはバスルームにいそいそと入りました。出てきたときは肌が女学生のようにかてかしています。ミス・ラフォースはそのてかてかを取り除くための材料をかき集めます。ミス・ペティグルーはミス・ラフォースと交代で鏡の前に座りました。

すでに、その姿にはちよつと乱れが見えました。ミス・デュバリーの巧みなカールはすっかりばらばらになっています。ドレスも少ししわになり、ミス・ペティグルーは、炭鉱から上がってきた作業員のように顔を「ごしごし」すってしまいました。さりげない「シック」な雰囲気は消えています。黒のベルベットのドレスももう洗練された感じには見えません。明らかにしわくちやになってしまっています。

「グウイネヴィア」とミス・ラフォースが舌を鳴らして非難します。「ぼろぼろじゃない」

急いでミス・ペティグルーNo.1をミス・ペティグルーNo.2に直す工事に取り掛かります。

「無駄ですわ」とミス・ペティグルーはあきらめたように言いました。「またよれよれになっちゃいますわ。これまでずっと野暮ったかったんですし、これからもずっと野暮ったいままなんですわ」

「なに言ってるの」とミス・ラフォースが厳しく言い渡します。「そんなの単なるコンプレックスよ。一回でもきれいになったなら、いつでもきれいでいられるってことなのよ。ちよつと練習がいるだけなんだから」

「どんなに練習したって足りませんわ」

「そんな悲観的にならないの」

「雌ブタの耳から絹のお財布は作れませんわ」

「屑から紙を作れるでしょ」

「スマートな女性と、そうでない女性がいるんですよ」とミス・ペティグルーは身を乗り出して言いました。「両方とも同じような体型をしててもね。どうしてだか理由は分かりません。あたくしはそうでないほうなんです」

「全然、意味ないわ」とミス・ラフォース。「お腹を引っ込めて、背筋を伸ばす。それが秘訣よ。猫背になって歩けば、服もそつなっちゃっわ」

ミス・ペティグルーの顔のお直しが終わりました。ミス・デュバリーのウェーブをしっかりと元の場所に固定します。赤い薔薇をミス・ペティグルーの肩にとめました。ミス・ペティグルーは鏡に映った自分を見て嬉しそうににっこりします。

「一生で初めて、あたくし自分でいるのが満足ですわ」

借りた毛皮のコートを身につけます。ミス・ラフォースは白いキツネのカラーがついた、素晴らしい黒のイヴニング用マントを羽織って出てきました。急いで手袋とハンカチとイヴニング用のバッグを手に取ります。

「どうしよう。こんなに遅れるなんて思わなかったー」

急に大慌てで、ドアに駆け寄ります。ミス・ペティグルーもその後に行きました。良心が小さな声できいきい何か言いましたが、抜け目なく耳を塞ぎます。王様が一連隊を引き連れてきたって、この楽しみをミス・ペティグルーから取り上げることはできないでしょう。それに言い訳はありません。一日中、いろんなことがめぐるしく起きすぎて、いつものあたくしではないのだもの。頭がぼーっとなっているおかげで普段と違うことばかりしてしまうんだわ。

ミス・ラフォースの後ろをぴょんぴょん弾む足取りでついていきます。自然の肌色は人工的に強調され、目は輝き、息を弾ませています。いよいよ冒険のはじまりです。深紅の孔雀、ナイトクラブ。その名前だけで、天にも昇るような心地になります。亡くなったお母様が生き返ったらなんておっしゃるかしら？ あのお母様の娘がなんとこの墮落の深みにはまってしまったことでしょう。でも、あたくし、そんなことを気にし

ているかしら？ してませんかとも。ミス・ペティグルーはせいせいしながら、率直に、つきつきとそれを認めました。今晩は羽目をはずすんです。街に繰り出して大いに飲んでやりましょう。またトニーのカクテルをいただくことなくっちゃ。レディだってドンちゃん騒ぎをするんだわ。ああ、灰色の過去など吹き飛ばしてしましましょう！ これから今までいちどもしたことがない楽しみを味わいに出かけるんです。世界中のお説教を束にしたって、ミス・ペティグルーの気持ちを換えさせることなどできません。さあ、これから深い海に潜るのです。紅色に染まる広大な海に。

ミス・ラフォースの後ろについて、ここにこしながら廊下を進みます。エレベーターが来るのを待たずにミス・ラフォースは階段を駆け下り、ミス・ペティグルーもすぐ後ろにくっついていきます。ポーターの呼ぶ口笛に答えて、タクシーがキキーツと止まりました。ミス・ラフォースが運転手のほうに近寄りましたが、ミス・ペティグルーはその隣に行くと、顔をほころばせながら威張って言いました。

「深紅の孔雀 にやっつてちょうだい」とミス・ペティグルー。「大急ぎでね」
二人は乗り込みました。

灯りのついた通りを、タクシーはうなりをあげて通り過ぎます。ミス・ペティグルーは背筋を伸ばして、きらきらする瞳で窓の外を眺めました。もはや雨に濡れた一月の街にわびしさはありません。妖精の看板が建物にきらめき、魔法の角笛がひっきりなしに鳴り響いています。宮殿の灯りが舗道にまばゆい光を投げかけます。人々のざわめきと、興奮と、鼓動と、震えに満ちた、ここは伝説のアヴァロンです。シルクハットの騎士、飾り立てたご婦人たちが、幸せそうな顔をして、どこか素晴らしい場所にいそいそと向かっています。ミス・ペティグルーもその一人。でも、この二本の脚よりもずっと貴族的な乗り物に乗って。今、ミス・ペティグルーには行き先がありました。それだけでなんと違うことでしょう！ 世界がひっくり返るほどの違いです。これぞ人生。傍観者ではなく、人生の役割を得たのです。ミス・ペティグルーは馥郁とした甘い空気を吸い込みました。

隣に座っているミス・ラフォース。優雅で、落ち着き払って、見事なカールの先の先まで完璧に整えたこの人が、あたくしのお友達だなんて。ミス・ペティグルー、オールドミスで、退屈で、平凡で、仕事もなく、なんにもとり得のない、このミス・ペティグルーが豪華絢爛のナイトクラブに向かっているなんて。天国のように飾りたて、悪魔のように恥を知らず、快楽に沸き立つ場所に。

（ああ！）とミス・ペティグルーはうっとりと考えました。（目が覚める前に、今晚、死んでしまえたらいいのに）
タクシーが止まりました。